



大使館

下

EMBASSY

レスリー・ウォラー

広瀬順弘=訳

大使館

EMIBASS

レスリー・ウォラー

広瀬順弘＝訳

下

読売新聞社

たいし かん
大使館 下〈全2巻〉

1992年(平成4年)2月14日 第1刷

1992年(平成4年)3月31日 第2刷

著 者 レスリー・ウォラー

訳 者 広瀬順弘

編集人 篠原義近

発行人 杉林 昇

発行所 読売新聞社

〒 100-55 東京都千代田区大手町 1-7-1

〒 530 大阪市北区野崎町 8-10

〒 802 北九州市小倉北区明和町 1-11

〒 460 名古屋市中区栄 1-17-6

印刷/明和印刷株式会社 製本/大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り換え致します。

Printed in Japan

ISBN4-643-92005-X C0097

大使館 下

大使館 下巻目次

<i>Part 4</i>	第十七章……………	5
<i>Part 5</i>	7月2日 金曜日……………	51
<i>Part 6</i>	7月3日 土曜日……………	137
<i>Part 7</i>	7月4日 日曜日……………	241
エピソード	7月11日 日曜日……………	323

上巻目次

<i>Part 1</i>	6月28日 月曜日
<i>Part 2</i>	6月29日 火曜日
<i>Part 3</i>	6月30日 水曜日
<i>Part 4</i>	7月1日 木曜日

装丁 渋谷育由
カバー写真 オリオンプレス

主な登場人物

大使館関係

エドワード(ネッド)・フレンチ……………国防武官, 米国防軍情報部大佐
ラヴァーン……………ネッドの妻
モーリス(モー)・シャムーン……………ネッドの部下
ロイス・コネル……………首席公使
アドルフ(バド)・フルマー……………大使
スーザン・パンドラ・フルマー……………大使夫人
ジェーン・ワイル……………領事部参事官
P・J・R・パーキンズ……………イギリス人職員, 営繕課
アンスパーカー……………政治部
ビル・ヴォス……………経済通商部
メアリー・コンスタンチン……………広報部
ガス・ヘフリン……………総務部
マックス・グリーヴズ……………ジェーンの部下, FBI要員
ポール・ヴィンセント……………領事部員
ハリー・オルテガ……………ウィンフィールド・ハウス警備主任
ケヴィン・シュルサイス……………総務部警備担当
ナンシー・リー・ミラー……………ケフテの愛人, 大使館事務局タイピスト

テロリスト関係

バート……………ドイツ人活動家
ケフテ(ドゥリス)……………アラブ人活動家
ドクター・ハカド……………アラブ人眼科医, 資産家
レイラ……………ハカドの妹
アルド・スグロイ(ファウンズ)……………自称映画プロデューサー

その他

E・ローレンス(ラリー)・ランド……………CIAロンドン支局長
ジェームズ・フレデリック・ウィームズ……………さぎ師
トニー・リオードン……………ウィームズの仲間
アンブローズ・E・バーンサイド……………「公園の番人」
グレブ・ボナマレンコ……………タス通信記者
ナイジェル・ハーグレイヴズ……………ゴシップコラムニスト
ブリックトップ……………モサドロンドン支局長
マルヴィー……………警視庁公安部警部補
シリアン・ラム……………TVインタヴュー番組司会者
ジョン(ジョック)・プリングル……………MI5要員

第十七章

ナイツブリッジにあるレバノン人経営の高級レストランから昼食の温かい料理が運ばれてきた。レイラは二人の男性に料理を取り分けながら、水の帝王エリアスにはラムのカバブのいちばんいい部分がいくように、とくに注意した。それにしても、もっと若くて健康的な男性だろうと期待していたのに、こんな干からびた棒のような年寄りとは。兄が独身の男性を家に招くときは、どうしていつもこんな老人か、がっかりするほどの若造ばかりなのかしら？ それに、あの馬のように歯をむき出す笑い方！

兄のマフメトには、火曜日の夜のゲストが偽者だったことをまだ話していなかった。レイラはあのと兄と電話で話せなかったのだ。だが、むしろそのほうがよかった。ラティーフに対する兄の歓迎ぶりを見ると、この昼食はとても重要な儲け話につながるものらしいので、兄を刺激しないほうがいいからだ。ゲストに敬意を示す意味で、マフメトは数種類のびん入りミネラルウォーターを用意させていた。フランスとイタリアの水をそれぞれ数本、ベルギーの水を一本、イギリスの水を二本だ。それらの小さ

なびんは広い居間にある低いカクテルテーブルに人目を引くように並べてあつた。

「いちばんいい水はこのイギリスには来ません」ラティーフはヒヨコマメをいくつかフォークで突き刺して、一つずつゆっくりと食べながら言った。「これはイタリアの南のマンジアトレラの水ですね。きのうあなたにお会いしてから、あなたの友人の映画プロデューサーから連絡があつたので、イタリアには関心があるのです」

マフメトはしばしボカンとしてラティーフの顔を見つめていた。「アルド・スグロイのことですか？しかし、友人ではありませんよ」

「しかし、彼の示した提案はハカドさんのをかなり上まわるものであることは、あなたも認めるはずですよ」水商人はさらに言った。

「ラティーフさん」ハカドの語気が少々鋭くなった。「スグロイがわたしの提案を上まわる条件を出したですって？ そんなばかな」

「まったく、このババ・ジャヌージの水はおいしいですな」

「気に入っていただけでよかった」ハカドは何かしきりに考えているようだった。「デザートの入る余地を残しておいてくださいよ、ラティーフさん。ラバンのマハルピア（ヨーグルトを添えたライスプディング）ですから」それから、彼はまたしばらく間をおいた。「とにかく、守勢にまわるといのは、どんな場合でも得策ではありません。そのいい例がアイルランドです。アイルランド政府は誘拐や爆弾テロ、銃撃戦その他による市民の被害を防ぐために、非合法のIRAテロリストに定期的に毎年多額の賄賂を提供していると言われています。フランス政府もPLOと同様の秘密協定を結んでいる。これは、あくまでも利潤を追求するビジネスマンのやることではありません。貸すことですよ、ラティーフさん。カネを貸す、これだけが賢いやり方です」ハカドはこんどはもっと長いあいだ沈黙した。

「正規の銀行ローンも、見返り担保は、どんな形であれ、銀行家が認めるものであればよいことになっています。銀行家のなかには土地、麻薬、受取勘定、ヤミ金塊などを求める者もいます。これは従来のやり方です。しかし、〈パンユーラシアン〉は見返りについてはつねに偏見をもたないようにしています。たとえば、われわれのいちばんの成功例は、台頭する政治勢力に対する貸し付けです。借り手は最初は単なる体制への反逆者にすぎないでしょう。しかし、何か月か後にはその借り手が支配者になって、投資は成功し、われわれが出したカネは配当を伴って返ってくるわけです」

「しかし、それにしてもあなたの友人のスグロイ氏の示した条件のほうがはるかによいというのはどういうことでしょうか？」ラティーフは、すねたような言い方で不満を漏らした。

「はるかにいい条件ですって？ ラティーフさん？」ハカドは軽蔑に近い横柄な口調で言った。「あなたはこの企画に五十万ポンド投資するだけなんです。それに対して五百万ポンド以上の払い戻し金を支払うと提案しているんです。十倍の利益でしょう。しかも、一週間以内に」

やせぎすの水商人はカバブのスパイスのきいた肉汁の残りをピータですくいて取って言った。「しかしですね、スグロイ氏は同じ投資金額に対して一千万ポンドの払い戻しを見積もっているんです。二十倍ですよ、ハカドさん」彼は長いあいだピータをもぐもぐとこんでいた。その威圧的な、馬のような歯なら、数秒もあれば、やわらかいパンなんかかみくだいてしまふだろうに。

やがて、彼は口のなかのものを飲み下した。そのときはじめて、マフメト・ハカドはこの男ののどがいかに貪欲な動きをするのに気づいた。

ジェーンはネッド・フレンチの部屋の閉まっているドアをノックした。ネッドとモーリス・シャムーンのしている仕事は国防部のほかのスタッフもだれも関与できないものであることは、ひとに言われる

までもなく、彼女は知っていた。だから、秘書も文書整理係も入れないで、二人だけでやっているのだ。「だれ？」なからネッドの問う声がした。

「ヘウエスタンユニオン」です」

ドアの錠がはずされる音がした。ドアが開くと、シャムーンのバシリスクのような眼が彼女に注がれていた。他人の顔を取って付けたようなぎこちない笑顔だ。ネッドはドアのノブに手をかけたまま、まゆをひそめた。

「ヘウエスタンユニオン」はこの数年電報を配達してないはずだ。してたところでさえ、ほっそりしたブルネット美人はまず雇わなかった」

人まえでは用心深くうそをつき、たがいに避け合い、儀礼的にうなずいて無愛想な事務的な会話を交わすだけにしていたこの数か月だったのに、いまになって、ネッドはふたりの仲を公然のものにしようとしているのか？ 眼の下に深いしわが刻まれている。緊張つづきのせいかしら、と彼女は思った。

「モー、このご婦人と五分ほど話していいかね」

だが、シャムーンはすでに気をきかせて自分の部屋へ行こうとしていた。「十分でもどうぞ」部屋を出ながら、彼はそう言った。

「彼は知っているのね？」ジェーンは小声で言った。

ネッドは首を横に振った。彼女が椅子に座ると、そのうしろで彼はドアを閉めた。「どうしたんだ？」

「どうしたって？ 大好きなあなたの顔を見たかっただけよ」

「冗談はやめてくれ」ネッドは大きく息を吐いた。「ゆうべは、ひどかったんだ」

「ラヴァーン？」

彼の疲れたような眼がちよつと見ひらかれた。眠っていないのだ、とジェーンは思った。「きみの家から帰ったあと、ひと晩じゅう警官に付き合っていたんだ」と、彼はぼやいた。「アメリカ人が死んだ。その男は、きみにも話したが、月曜日にジョギングをしていた男だと判明した。ミニがひき逃げしようとしたところに、たまたまわたしが居合わせたと言っただろう。このリオードンという男は……」

「アンソニー・リオードン？」

「ああ、彼の仲間はトニーと呼んでいた。知っているのかい、この男を？」ネッドは彼女を見つめた。「うわさを聞いただけ」ジェーンは若い法律家のポール・ヴィンセントが週のはじめに話したことを説明した。「おそらく……」と、彼女は締めくくった。「CIAのお偉方が保護しているかぎり、リオードンとウィームズは何だつてできるわ」

「ウィームズ？」ネッドは机の上の書類を乱暴にひっかきまわした。「きみは若いから、シカゴのテッド・ウィームズというダンスバンドのリーダーを覚えていないかな。ボーカリストの代わりにエルモ・タナーという口笛吹きを使っていた」

「ボーカルの代わりに口笛？ また、わたしが知らないと思って」

「いや、ほんとうだ。うそじゃない。ウィームズね。これだ」ネッドはホッチキスでとめてある分厚い書類の束を取ると最後のページまでめくった。「パンドラの招待客リストだよ。ほら、ウィームズの名前が客のなかに入っている。ジェームズ・F・ウィームズ？」

「それよ。日曜日に招待されているの？」

「ラリー・ランドのあつかましいあだ花のひとりだ」ネッドは別の書類の束を手にして調べた。「ない。CIA要員としては載っていない。ランドのやり方はちよつと度がすぎるな」彼女が腕時計に眼をやるのを見て、彼は言った。「もう少しいだらう」

「どんなに人がよくたって、わたしたちがまだ仕事の話をしているとと思うほど、シャムーンは間抜けじゃないわ」

「彼なら心配いらぬ。話してもいいという意味ではないが。あの男ならたとえ気づいていても、振る舞い方を心得ている。彼は友人だよ」

「だから、みんな陸軍に入るのね。生涯の友情を築くために？」彼女が立ちあがってドアを開けにいった。「それで、これが最新の招待客の人数です、けさの十一時現在で二百七人です」彼女の声ははつきりとよく通り、わざとらしさを感じさせなかった。「フルマー夫人のほうはしだいに形勢不利になりつつありますわ。しかも、これはみな、ご本人からの自発的なキャンセルです。当日になって来ないゲストも多いでしょう」

彼女がドアを閉めるまえに、ネッドは黙ってキスを送った。それから電話を取るとランドの専用電話の番号をたいて、相手が答えると盗聴防止用に切り換えた。

「ラリーか？ ネッド・フレンチだ」

「おお、ちようどいい。新しい身分証明書がどうかという話は何なのだ？」

シャムーンからすでに十時の会議での出来事について報告を受けていたネッドは、なにげない調子で切り返した。「シュルサイスの報告はそんなに早く届くのか？」

相手は沈黙した。ようやく、「どういふことなんだ？」

「招待客にはちゃんとした身分証明書を提示してもらおうということだ」と、ネッドは答えた。

「招待状を受け取っているんだろう。それを門で見せればいいんじゃないのか？」

「安全に対するきみの考えはそんな程度なのか、ラリー。わたしは宇宙時代のハイテクで、最先端技術のホログラフィーを利用した、レーザーで読み取る証明書のことを言っているんだ」

「かみつくなよ、フレンチ」

「テッド、いや、ジム・ウィームズとは何者だ？」

「え、何？」

「ジェームズ・F・ウィームズ。ある投資詐欺事件にかかわった二人の田舎者の片割れだ。きみのところの人間らしいな、ラリー。そうでなければ、ラングレーか」

「好きなように思えばいい、フレンチ。身分証明書の話をろくにしないで、こっちの話が聞けると思ふのか。レーザーで読み取るとはどういう意味だ？」

「そっちのほうは言葉のあやだと思ってくれてもいい、ラリー。だが、ウィームズのほうは冗談ではすまないぞ、リオードンを殺したからには」

「童謡じゃないが、だれがコマドリを殺したの、か？」ランドは耳ざわりな声で言った。「何をかき出そうとしている、フレンチ？」

「この件は捜査の妨害はできないぞ、ラリー。公安部が乗り出してゐる。ロンドン警視庁が殺人事件として捜査を開始したんだ」

「ああ、そろそろシャーロック・ホームズがここにやって来るころだろう。消えろ」電話は切れた。

ラリー・ランドは赤い電話のキーパッドをたたきつづけた。三度めにやっと線がつながって、アメリカで呼び出し音が鳴りはじめた。彼は特別製の椅子の上でいらいとからだを動かしていた。この椅子に座ると尻が十五センチ高く持ち上げられるので背が高く見えるが、その分、彼の短い脚のつま先はブラブラと宙に浮いていることになる。

「もしもし」眠気の覚めやらぬ声が聞こえた。ロンドンでは正午だが、ヴァージニアのラングレーは午

前七時まえだ。

「だれだ？」ランドは不機嫌な声できいた。

「だれだ？」不快げな声が返ってきた。

「これでは漫才だな。ランドだ、ロンドンの」

「支局長？　ダラカーです」

「なぜ最初からそう言わないんだ」ランドは怒ったように言った。「ジェームズ・F・ウィームズについて調べてくれ」

「公文書課は一時間後でないと始動しませんよ。そちらの午後二時ごろに暗号文にしてファックスで送ります。それでいいですか？」

「それと、リオーダンの足どりも調べてくれ。ウィームズとの関連を」

「何をやっただんです？」

「証券詐欺だ、たぶん」ランドは推測で言った。

「それはFBIの管轄です」

「かまうもんか、ダラカー。両方とも至急に要るんだ。国際犯罪に関係していると言え」

「国家の安全にかかわる犯罪だと？」ダラカーは言った。

「生意気なやつだ！」ランドは受話器をガチャンと置いて、特製の椅子の背に乱暴に寄り掛かった。椅子は悲鳴をあげるようにきしんだ。ランドの爆発寸前の怒りはネッド・フレンチに向けられていた。あの男は思ったとおりの食わせ者だ。一匹オオカミで単独行動をとるやつ。国の安全を脅かす危険なやつ。どうしても追い払わねばならぬ、じゃまなやつだ。

だが、あいつには一目おかざるをえない。身分証明書の発行をぎりぎりまで延ばすのは頭のいいやり

方だ。このラリー・ランドでもその手を使う。相手方は手遅れ寸前まで動きを封じられることになるわけだ。フレンチのような切れ者はきつとそれを承知でやっているのだ。

それがあの男のきわめて危険なところだ。定年まで勤め、目的を果たして年金を稼ぐような単細胞の軍人ではない。フレンチは違う。いわば、信念の男だ。ある意味では、彼がコネルをはじめ、大使館の役立たずどもを仕込むのにむだな時間を費やさざるをえないのは、もったいない話だ。しかしまあ、それも仕方ないことだ。

何を考えているのか。信念に燃える切れ者など、この世界にはいないほうがましなのだ。長い目で見れば、単細胞のほうが扱いやすい。氣どったりしないで、言うことをすなおに聞き、命令に従うからだ。ネッドはそうはいかない。この世界で生きるには頭がよすぎる。

バド・フルマーは実際には部下を率いて事業に携わったことはなかったが、父親のオフィスにはしばしば顔を出していた。若いころには自分のオフィスまで与えられていた。もっとも、それはとりつくるためで、フルマーストアの経営陣のなかの重要なポストを与えられることはけっしてないだろうと彼が悟るまでのことだった。結局、ほかの多くの場合と同様、そこでも自分は役立たずなのだと感じさせられたのである。

バドが人生について知っていることはなんであれ、ハンターがやるような物まねで学んだのだった。ハンターは動物の足跡をたどって森のなかを忍んでいくとき、狙う獲物の習性をまねて、同じテクニクや隠れ場所を使う。それとよく似たやり方で、バドはきょうも新たなテクニクを身につけた。ビル・ヴォスが昼食に招いたグループに別れを告げて大使館の自分のオフィスにもどってきたときの物腰は、事業経営者のみせる態度のコピーみたいだった。

ゲストの大部分は若く、四十歳以上はすくなかったな、と彼は思い返した。実業界のリーダーであるかれらの注意深い計算ずくの振る舞い方はウィムズを思い出させた。特有の言葉遣いも同じで、人からかかっているような、いかにも皮肉っぽい、それでいてよそよそしい言いまわしで、何ひとつ正式の名前で呼ばず、何でも逆の言い方をするのだ。会食中、ゲストの二人が、かれら新人類にとっては議論といえるものを始めた。ふつうなら、だれも、どんなことに対しても明確な立場をとらないもので、この連中はみんな同じチームを応援している野球の見物人のようだ、とバドは思ったくらいなのだが。

「それはすばらしい」イギリス政府も他国同様、窮すれば輸入品に対する貿易規制をさらに強めるだろうというビル・ヴォスの発言に対して、客の一人が言った。「それはすばらしい」というのは、ちつともすばらしくないという意味だ。「それがホワイトハウスを揺さぶることはあまりないでしょう」と言えば、ホワイトハウスは大いに振り回されるだろうということなのだ。

と、別の客が最初の男のことを自由貿易主義者だと言った。まるでエイズの話をしているような言い方で、そのゲストはこう付け加えた。「ひとつアメリカのコンピュータのハードウェアを売ってみたいかがですか？」つまり、売ろうとするだけむだだということだ。「小柄な黄色い兄弟たちに対抗するには品質管理をきびしくするしかないでしょう」つまり、そんなことをしたら負けるといふことだ。

「結局のところ、自由貿易とは何か、教えてほしいですな」要するに、そんなことは聞きたくないという意味だ。

たしか《^{タイム・オン・マイ・ハンズ}時間をもてあます》という題名の古い歌があつたな、とバドは思い起こした。これは人生そのもののテーマソングではないかな？ すくなくとも、このバド・フルマーの人生の。父親からじかに思い知らされて、自分は役に立たない冗員だといつも思うようになってからは、時間とは浪費し、投げ捨て、ぶち壊すものになってしまった。いまも、これから夕方六時までこれといった予定も入っていない